
それぞれに特徴的な職場でのペットとのかかわり方のお話をいただいた後は、西村亮平先生（日本ペットサミット会長、東京大学獣医外科学教室教授）の進行のもと恒例の質疑応答の時間に。会場からはさまざまな質問が寄せられ、参加者からの意見も飛び交いました。



ー社員が会社にはいない時間帯や会社がお休みのときには、猫の世話はどうしているのですか。

高澤さん：平日は社員が帰ってしまうと夜は猫たちだけになりますが、夜間の警備はしっかりされています。週末や年末年始などの長い休みのときにはペットシッターさんをお願いして世話をしてもらっています。

堀さん：土日はお世話当番がありまして、スタッフの誰かが必ず会社に行くようにしています。夜間についてはカメラを何か所かに設置していますので、それを通じてだれでも猫たちの様子を確認できるようになっています。

ー盲導犬を帯同するにあたり、犬が嫌いな人をどのように説得したのでしょうか。

足立さん：形は犬なのですが、仲間だということをお話しました。言葉は通じないかもしれませんが意思は伝わりますし、帯同している本人に大きなメリットがあるから大事にしてください、というようなことを何度も何度も伝え、理解してもらおうようにしました。それでもやはり壁はありますが、今も理解してもらえるよう努力を続けています。

高澤さん：ペットフレンドリーオフィスではありますが、社員でペットを飼っている人は 20%くらいです。動物好きの度合いも人それぞれだと思いますが、たまたま会社に猫がいる、たまたま犬を連れてきていい会社である、という感じで許容しあいながら働いています。すべての人にペットを好きになって欲しい、飼って欲しいということを会社が強要しているわけではないので、そのような違いも個として認め、お互いに許容できればいいのではないかと思います。

西村先生：そこは非常に重要なところだと思います。オフィスに動物がいてもいいんじゃない？といった雰囲気にもっていくのは難しいかもしれませんが。

高澤さん：それには動物に限らず、自分と違う考えを持った人に対して、皆がそれぞれその考えを尊重しあって働くというように、普段からいろいろな違いを認める環境づくりが大切なのだと思います。

ーマースジャパンのペットフレンドリーオフィスを導入するときにはかなりの苦労があったのではないのでしょうか。

川重さん（マースジャパンの獣医師）：オフィスの選定にとっても苦労したと聞いています。公共スペースに動物入れ

ないとか、アレルギーの方もいますので掃除をまめに行うとか、動物はケージに入れて貨物エレベーターを使う、1日に連れてきていい頭数の制限など、細かに約束ごとを決めたようです。

西村先生:なるほど、借りの段階からして大変なのですか。会社の風潮として動物OKだとしても、入り口でつまづいてしまう状況なのですね。今回の例会開催にあたり、職場に動物がいる会社を探すのにとっても苦労しました。実際に日本でオフィスに動物がいるということは稀と言わざるを得ないのかと思います。

ー補助犬の受け入れに関する法律があるにもかかわらず、実際に盲導犬を受け入れるのに苦労されたということに少なからずショックを受けました。まだ実社会に法律が及んでいない状況なのでしょうか。

足立さん:法律ができたり制度で決められているとしても、実際自分に降りかかってくるとなると頭では分かっているながら拒絶反応を起こすというところがあると思います。障がい者の雇用ですらまだ反発があるような世の中ですし、障がい者がさらに盲導犬を連れてくるとなるとなさらでしょう。その部分をどれだけ理解してもらおうかということがとても大変でした。そのためにも社内では、障がい者の方々にはこんなにすごい能力があるのだよということ徹底して周知しました。

渋谷寛先生(弁護士):犬に関しては補助犬法がありますが、補助犬法は積極的に社会に入っていくことを認める法律で、動物が社会に入ってきてはいけないという法律はありません。そこは契約の自由に任されている部分になります。たとえば賃貸借契約であれば、大家さんは誰に貸すかを自由に決められます。ですので大家さんの理解を深めていけば、ペット可の物件が増えていくと思います。労働問題的に気になるところは、やはりすべての人が動物好きではないということです。ペットを会社に連れてこようという流れになっているときに、動物が苦手な人が反対意見を言い出せないような状況であると多少問題があるのではないかと思います。事前にアンケートを取るなどして、全員の快諾のもとに進めていくといったことを考えたほうが良いのではないかと思います。

ー犬がオフィスにいるだけでそんなにも雰囲気は変わってくるものなのでしょうか。

高澤さん:犬がいるのといないのとではかなり違います。ペットフレンドリーオフィスということで毎日オフィスに犬がいることを想像される方が多いと思うのですが、実際に犬や猫が会社にくるのは1週間に1回あるかないくらいです。強化週間のときは毎日5頭くらい来ますが普段はそんな程度ですので、犬や猫がやってくるとなると社内が盛り上がります。

ー盲導犬協会としてはオフィスに盲導犬を！というようなプロモーションはされているのでしょうか。

吉川明さん(日本盲導犬協会):とくに積極的にプロモーションは行っていませんが、盲導犬をオフィスに連れて行く際には、まず会社に受け入れてもらえるよう理解を求めに行きます。その点では大方うまくいくのですが、やはり建物のところで問題が出てくることが多いです。たとえば貨物用のエレベーターしか乗れないというのは補助犬法上では問題となることなのですが、それでも絶対にダメだと言われてしまうことが多々起こります。建物に関して我々が困っているのが、マンションにお住まいの方でパピーウォーカーをやりたいというケースです。エレベーターは犬を抱いて乗るといったような規則があるところが多く、ペット可のマンションでも大型犬はダメだと言われてしまうのです。私からしてみれば犬を抱いてエレベーターに乗らなくてはならない根拠は一体どこにあるのだろうと思うのですが。そのようなところをペット業界の人がマンション業界の人と話し合っただけで変えていかないと、今後ペットを飼わずに育った子どもが増えていき、その子どもが大人になるとますますペットを飼わない世の中になっていくのではないかと危惧しています。建物の問題はほかにもあり、盲導犬ユーザーも家を借りるときにほとんどの人が断られる経験をしているようです。しかし実際に盲導犬と一緒にその物件に入ってみると、問題を起こさなければかりか周囲にいい効果を及ぼすケースが多いですから、賃貸物件に関して我々もどのように対応していくべきかを考えていくことは重要だと思っています。

西村先生:やはり入り口から難しいところがあるのですね。日本の社会における動物の立ち位置といいますか、かなり根幹にかかわる部分から変えていかないと変わらないのかもしれませんが。